



Kiniro no Kureyon

著 金色のクレヨン

ill. 片桐

# MAIN CHARACTERS

## ハンク

伝説の冒険者。  
剣、魔法ともに腕は  
一流で、人間離れした  
身体能力を持つ。

## フラン

アデルに強く  
心酔している冒険者。  
長槍を使った  
戦闘が得意。

## アデル

町で有名な  
美食家のエルフ。  
料理を気に入って  
もらえると店が  
繁盛するという  
噂がある。

## エスカ

マルクの冒険者  
時代からの知り合い。  
無邪気で少年っぽい  
一面を持つ。

## マルク

転生後に冒険者として  
お金を貯め、前世からの  
夢だった焼肉屋経営を  
実現した青年。  
お人好しな性格。

## 第一話 念願の焼肉屋開店！

ランス王国の都市から外れた土地にあるバラムの町。

俺——マルクはこれから開店する焼肉屋の準備をしていた。

店の場所は町の中心から離れていて、人通りはまばらだ。

バラムは規模の大きい町ではないが、中心部はそれなりに栄えている。

この世界に転生したと気づいてから、日本にいた時に失敗した飲食店経営を始めるまで、冒険者をして資金集めをした。今日までの道のりは長かった。

転生前の記憶が蘇よみがえったのが十四歳。

冒険者を始めたのが十七歳。

目標の資金が貯まり、こうして店を始めたのが二十一歳。

——だいたいそんな感じだった。

「準備はこれでいいよな。他に忘れたことはないはず」

店の前のテーブルに鉄板の載った焼き台を二台置いた。

お客が腰かけるための椅子はすでに並べてある。

本来の焼肉は台の中でガスか炭を使うわけだが、この世界ではどちらも使えない。

その代わりにこの店では別の方法を使うことにしていた。

「——サスペンドフレイム」

鉄板の下にある空洞に炎が浮かぶ。

使用者が死なない限り火は消えず、消したい時にすぐ消せて、魔法初級者でも出力の調整が可能な魔法だ。

実際に試してみたところ、火力もちょうどよかった。

そうこうしているうちにお昼時になった。

バラムの人たちは正午きっかりに昼食を食べる習慣はないが、昼頃になると食事を始める人が増える。

このタイミングに合わせて俺は肉を焼き始める。

屋外で肉を焼くことで、通りがかった人に匂いが届くと計算しての行動だった。

薄く油を引いた鉄板に牛のロース肉が触れると、直後にジュツと音がした。

どんどん肉に火が通って色が変わり、美味しそうな匂いが漂ってくる。

先に食事を済ませていた俺でも、食欲をそえられる香りだった。

肉が焦げないように火力を調整して焼いていると、何人かの通行人がこちらを見ているのが分かった。

おそらく匂いが気になるのだろう。作戦は順調だな。

肉を焼き続けるうちに目の前を通りがかった男が近づいてきた。

「何だ？ 肉……を焼いているのかい？」

「そうです——あっ」

調理の準備に気を取られて看板を出し忘れていたことに気づいた。

冒険者仲間を作ってもらった手作りの看板を店の前に立てかける。

看板にはこの世界の文字で「冒険者の隠れ家」と書かれている。

「うちは焼肉屋といって、自分で肉を焼きながら食べる店なんですよ」

「自分で肉を？ 初めて聞いたな。値段はいくらぐらい？」

「銀貨一枚で一人前。ちょうどそこにある分ぐらいです」

「昼飯には少し高い気もするが、美味そうな肉だし……それじゃあ一人前頼もうか」

「はい！ ありがとうございます」

お客第一号は商人風の男だった。

裕福そうな身なりで、提示した価格を問題なく受け入れてくれた。

俺はそそくさと調理場に入り、氷で保冷した簡易冷蔵庫から肉を取り出した。

仕込みの時に一人前ごとに切り分けておいたので、皿に盛りつけるだけでいい。

あとは肉の旨味を味わうために用意した岩塩を皿の脇に添える。

調理場を出て席に戻ると、男は興味深げに鉄板の下を見ているところだった。

「お待たせしました。牛ロースです。地元産の肉牛を使っています。肉に火が通ったら、こちらの塩でどうぞ」

「ほおつ、焼肉というのは岩塩で食べる料理なのかい。肉はこのまま鉄板で焼けばいいのかな？」

「はい、こちらの道具で掴んでひっくり返してください」

俺はテーブルにセットしておいた木製のトングを、男に手渡しながら説明する。

「まあ、ちよつとやってみるよ」

「ゆっくりどうぞ」

この国では肉を生で食べる習慣はなく、レアな焼き加減で食べることもない。肉料理はスープ仕立ての煮たものが多く、焼肉のように自ら鉄板で焼いて食べる場面は見たことがなかった。近い調理法といえば串焼きや丸焼きになる。

鮮度には注意しているし、お客が生焼けにする不安もない。

仕入れ先である精肉店のセバスが上質な牛肉を用意してくれたことも追い風だった。

お客の対応を終えて周りを見ると、心なしか通行人が増えている。

こちらの様子を気にするような人もちらほらいるし、寄っついていかどうか迷っているような人も見える。

実際に誰かが食べているだけで与える印象が違うみたいだ。

「店主、これはなかなか美味しいじゃないか！」

「……は、はい」

店主というのが自分であることに気づくのに少し時間がかかった。

お客第一号の男は満面の笑みを浮かべている。

「鉄板で焼いた肉がこれほどまでに美味しいとは」

「こちらの文化ではこういう食べ方はしませんもんね」

「こちら……？ 異国の者には見えないが、君はランス王国出身ではないのかい？」

「い、いえ、一般的にはという意味です」

危うく秘密を明かしてしまうところだった。

転生前の記憶が残っていることは話さない方がいいだろう。

「——ねえ、席は空いてるみたいだけど、座つてもいいかしら？」

「あっ、はい……いっ!?」

透き通る声を聞いて振り向いた瞬間、思考が停止した。

我に返ったところで相手の様子を確認する。

燃えるような赤く長い髪とエルフ特有の長い耳。

エルフという時点で珍しいが、その中でも特徴的な外見だった。

高貴な身分のようで質の高そうな衣服を身につけている。

「何？ 私は見せ物じゃないわよ？」

「いえ、失礼しました。そちらの席にどうぞ」

女エルフはこちらが示した席に腰かけた。

一挙一動が美しく見惚れてしまいそうだ。

彼女に気を取られていると、先に食事をしていたお客が立ち上がった。

「ごちそうさま。そろそろ帰らせてもらおうよ」

「ありがとうございます！」

お客第一号の男は小銭の入った布袋から銀貨を一枚取り出した。

それを渡そうとしてこちらに顔を近づける。

「……あれは美食家で有名なエルフだ。バーニングレッドという通り名で呼ばれている」

「は、はい」

強そうな名前に聞こえたが、男の話しぶりから食通のエルフだと理解した。

「彼女が黙りそうなほど美味い料理だったから、そこまで心配する必要はないと思うが……支払いの時に金貨一枚を置いていったのなら、それは彼女に認められた証だと言われているよ」

商人風の男はそう告げると、満足したような顔で去っていった。

二人目のお客でいきなり手強そうなのがやってくるとは。

こうなったら焼肉の美味さを堪能してもらって、満足させるしかない。

俺は静かに決意を固めると、受け取った銀貨をポケットの中にしまい、次の準備に取りかかることにした。

簡易冷蔵庫を開いたところで、牛肉の脇にある違う種類の肉が目に入る。シルバーホーンという馬型モンスターの肉で、親しい冒険者であるガルドが分けてくれたものだ。

ガルドとは俺が一度助けただけの関係なのだが、彼はそのことを恩義に感じているようで、味のいいモンスターから肉が獲れた時は分けてくれる。モンスター肉という呼び名では食べる気がしないというのはガルド談で、俺も彼に合わせて魔物肉と呼んでいる。ゴブリンやオークなど全部ひっくるめてモンスターと呼ばれるため、魔物と名づけることで心理的な抵抗を和らげる意図もあるのだろう。

シルバーホーンは転生前の記憶にある馬肉に近い味で、臭みがなくあっさりして食べやすい。食通のエルフであれば、この肉を評価してくれる余地はあるような気がした。

魔物肉を出すことに後ろ髪を引かれつつも、馬は乗るものという認識が一般的で、初対面の相手がどう反応するかは読めないことに気づく。前の世界ではカフェを経営していた時に、言いがかりめいた悪評に悩まされた苦い経験もあった。

俺は考えをまとめてから、一人前の焼肉を用意して女エルフの席に運んだ。

先ほどのお客から聞いた話では怖そうな印象を受けたが、そんなふうには見えなかった。

彼女は興味深げに鉄板やその下を覗いていた。

「お待たせしました。料理をお持ちしました。バラム産の牛肉を使った牛ロースです」

「サスペンドフレイムで肉を焼くなんて、面白い仕組みね」

女エルフは涼しげな表情で言った。

偉そうな口ぶりとはまではないか、評論家然としている雰囲気を感じる。

「ありがとうございます」

「でも肝心なのは味よね」

「どうぞ、召し上がってください」

「……ええと、これはどうやって食べるの？」

「この道具で焼いて火が通ったら皿に載せて、ナイフとフォークで食べます」

「なるほど、分かったわ」

「ごゆっくりどうぞ」

彼女の席に近づいた時に何かオーラののような気配が漂っていて、少し緊張した。

エルフの味覚が人間に近いのならば口に合わないことはないはずだが、美食家ともなれば、思わぬところで批判される可能性もある。

女エルフは鉄板で肉を焼き終えてから取り皿に移し、俺が説明したとおりに切り始める。

整った顔立ちと品格ある所作が、彼女の美しさを際立たせている。

フォークに刺さった肉がその口に運ばれた瞬間、俺の緊張がピークに達する。

いつの間にか手に力が入っていて、額にイヤな汗がじとりにじむ。

——自分の料理を他人に評価されるのは、いつだって緊張するものだ。

女エルフはゆっくりと咀嚼して、じっくり味わっていた。

食事の邪魔にならないように様子を見守っていたが、表情の変化はほとんど見られず、何を思っているのか読み取ることができなかった。

何も言わず、肉に岩塩をつけては口へ運ぶ動作を繰り返し、結局、彼女は無言のまま完食した。

完食した後も余韻を味わっているように見えたが、お気に召したのだろうか。

「店主、また来るわ」

「——あっ」

できれば料理の感想を聞きたいと思っただが、彼女はそのまま立ち去ってしまった。

ふとテーブルを見ると銀貨ではなく、一枚の金貨が置かれていた。

「これはおそろしく気に入ってくれたってことだよ……」

お客第一号から聞いた言葉を思い返しながら、俺は手にした金貨をじっと見つめてつぶやいた。

女エルフが帰った後も何人かお客がやってきたが、その誰もが初めて目にする焼肉に興味津々な様子だった。

それから、昼食時のピークが過ぎた昼下がり。



俺は店じまいを始めることにした。

初日の売上は銀貨十枚と金貨一枚。

一日目にしては好調な売れ行きだった。

俺はサスペンドフレイムの火を消して、気分よく鉄板を洗い始めた。

この世界にはお湯の出る水道がないため油污れは落とすににくい。

記憶の中にある日本の洗い場が恋しくなる。

片づけを終えた後、一人で肉を焼いて食べていると足音が近づいてきた。

冒険者をしていた時の名残り<sup>なごり</sup>で物音にはいまだ敏感だ。

いわゆる職業病のようなものだった。

「マルクさん、こんにちは！」

「おっ、エスカか」

「開店初日はいかがでした？」

「まずまずってところかな。あつ、肉食べる？」

「はい、いただきます！」

エスカが明るい表情で答えた。

彼女は冒険者の時の顔見知りで、俺よりも少し年下だった。

髪を肩の辺りまで伸ばしていて、愛らしい顔つきをしている。性格は一転して、少年みたいに活

発で無邪気だが。

「さあ、召し上がれ」

「いただきまーす！」

「今日は多めに用意したからな、遠慮しなくていい」

初日にしてはお客の入りもよく売上は黒字。くわえて、女エルフからもらった金貨もある。

「試食させてもらった時もそうでしたけど、焼肉ってすごく美味しいですね」

「そんなに喜ばれると照れるな」

俺とエスカはそれからしばらく肉を堪能した。

食事を終えてから、ふと気づいたことを口にする。

「そういえば、何か用事だったか？」

「そうそう、お肉が美味しくてつい忘れてました。明日マルクさんは忙しいですか？」

「いや、肉を仕入れにいくつもりだった」

「そうなんですね。こっちはバラム郊外のシカの駆除依頼を受けたんですけど、よかつたら一緒に行かないかなと思ってます」

「シカときたか。なかなかお目にかかれないし気になるな。仕入れはどうにでもなるし行くとするか」

シカはいわゆるジビエなので、店で売られていることは少ない。

「それじゃあ、明日の朝に町の出口で待ち合わせで」

エスカの用件が分かったところで、今日やってきたエルフのことを話してみようと思った。

「真っ赤な髪のエルフの話って聞いたことあるか？」

「アデルのことですかね。アデル・バーニングレッド。アデルが彼女の本名で、バーニングレッドが通り名です」

「俺は初めて聞いた名前だったけど、もしかして有名人？」

「バラムは辺境にあるので、知られてないですよね。都市部では有名ですよ」

「なるほど……今日、そのアデルがうちの店に来た」

「えっ!? バラムにいたんですね」

エスカは目を見開いて声を上げた。

「別のお客から美食家と教えてもらって怯んだけど、どうやら気に入ってくれたらしい」

俺はそう言っつて、懐に入れておいた金貨を取り出してエスカに見せる。

「すごいじゃないですか！ アデルの評価は信憑性が高いそうで、不評なお店は客足が伸び悩むみたいですよ」

それだけの人に気に入られたのは幸先がいい。

「この調子で評判が良くなるといいな」

日本で店を営んでいた時は追い風など一度もなく、逆風ばかりが吹き荒れていただけに、俺は安

堵するのだった。

翌朝。待ち合わせ場所に向かうとエスカが待っていた。

冒険者用の軽装備から防具を取り外したような服装で立っていて、その手にはシカを狩るための弓矢が握られていた。

「マルクさん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

軽くあいさつを交わしてから、俺たちは街道に向けて歩き出した。

上空に流れる雲の間から太陽が顔を覗かせる。

狩りをするには雨や曇りが向いているものの、これはこれで快適な天気だった。

「今回は駆除依頼って言ってたけど、作物でも荒らされたのか？」

「そうです。農家の方々が困っているみたいなんです」

ゴブリンなどのモンスターに比べて、野生動物に関する依頼はそれほど出ない。

俺が冒険者をしていた時も多くなかった。

「ギルドに依頼が来るほどシカが出るなら、食いつばぐれはなさそうだな」

「弓には自信があるんです。任せてください！」

エスカが胸を張って言った。彼女のふくよかなバストが強調される。

二人で世間話をしながら歩くうちに、エスカが目的地に着いたと教えてくれた。

普段は来る機会の少ない、畑が多い場所だった。

元々は森林だった土地を開拓したようで、畑の奥に木々が並んでいるのが見える。

シカからすれば隠れ場所になる森から絶好の位置に作物があることになる。これでは荒らされた

としてもおかしくない。

「この辺りにはいないみたいです。もう少し探してみよう」

「分かった」

野生動物に関しては専門外なのでエスカに案内を任せることにして、二人で移動を再開する。

彼女は畑に沿って進みながら、森林との境界に注意しているように見えた。

徐々に日が高くなり、気温が上がったように感じた。バラム周辺の気候は比較的乾燥しているため、蒸し暑さを感じることは少ない。

周囲に注意しながら歩いていると、エスカがふいに立ち止まった。

「——マルクさん、いました。静かにしてください」

「お、おう……」

彼女が姿勢を低くしたので、同じようにその場にしゃがんだ。

エスカの視線の先にシカがいるのだろうか。素人の俺の目では何も捉えられない。

エスカは集中しているようで、声をかけにくい雰囲気だ。

彼女は短く息を吸った後、左手に弓を構えて、右手に矢をつがえた。俺ははまだシカを見つけられないままなのだが、彼女は狙いを定めている。そのまま静観していると、森の一点に向けて矢が放たれた。

矢は想像以上の速さで、放った方向から鳴き声が聞こえた。

「さあ、締めにいけますよ」

「……そうだな」

こちらの世界の文化では、動物を捌いて食べることは当たり前に行われている。

しかし俺には、転生前の記憶の影響で抵抗が生じることも多々ある。

この世界で魚を捌いたことはあっても哺乳乳類を解体したことはない。

意気揚々と先を進むエスカが、腕利きの狩猟者に見えてしまった。

鳴き声が出たところに接近すると、畑と森の境界付近にシカが倒れていた。

一本の矢だけでは即死させることができなかつたようで、傷口から血を流した状態で足だけを動かしている。

エスカはシカの隣に立ち、迷いのない動きでナイフを突き刺した。

シカは短い悲鳴を上げて、すぐに動かなくなつた。

「ごめん、解体は任せるわ」

「いいですよ。少しかかりますけど」

エスカはそう返事をする、もくもくと手を動かした。

精肉店のセバスのところで作業を見学することはあるものの、この状態から解体することに慣れていないため、手伝いが必要ないことに安心する自分がいた。

俺はその場を離れて、座りやすそうな切り株に腰を下ろした。

「……んっ？」

エスカの解体作業を待ちながら少し休んでいると、周囲の空気に違和感を覚えた。

俺たち以外の気配を感じる。

シカであれば、こちらに身の危険を感じて逃げるはず。おそらく別の何かだろう。

立ち上がって違和感の正体を探っていると、少し先の茂みが揺れた。

息を潜めたまま護身のショートソードに手を伸ばす。

二、三歩下がって向こうの出口を窺っているとゴブリンが現れた。

大きな群れであれば警戒すべきだが、どうやら一体だけのようだ。

おそらく、シカの匂いに引き寄せられたのだろう。

「ギギッ——」

俺を脅威と見るべきか、取るに足らない相手と見るべきかを判断しているようだ。

ゴブリンは武器を持っているわけではないが、身体を揺らして臨戦態勢をとっている。

「おいしい、ケンカを売る相手はよく選んだ方がいいぞ——ファイアボール」  
ゴブリンを威嚇するために、俺は小さな火の玉を飛ばす。  
地面の落ち葉がいくらか焦げついた。

「グッ、ググッ……」

一対一ではやられると悟ったゴブリンは背中を向けて、茂みの方へ去っていった。  
引き返すゴブリンを見届けてから、燃えかすを踏んで消火作業を済ませた。  
地面が湿っているようで燃え広がる心配はなかった。

「やれやれ、一体だけなら深追いすることもないか」

冒険者の中には、ゴブリンへの個人的な感情から即抹殺という考えの者もいる。

だが、俺は弱い者いじめは好まないで、基本的に殺傷は必要最低限にしていた。

もっとも、コロニーと呼ばれる大規模な群れに遭遇すれば、俺個人の信念は抜きにして、ギルドへの報告義務が生じるのだが……

他に怪しい気配がないのを確認して、俺はエスカのところへ戻った。

ゴブリンを追い払っている間に、作業の区切りがついたみたいだ。

俺がエスカに近づくと切り終えた部位を並べているところだった。

「手際がいいな」

「お待たせしました！」

エスカが生き生きとした表情で声を上げる。

「さつき近くでゴブリンを見かけた」

「こんなところにもいるんですね」

「いたのは一体だけだから、はぐれの可能性が高い。そっとしておこう」

日本にいた頃の記憶が影響するのだろうか。弱い立場の者を一方的に攻撃することに抵抗がある。  
「いいんじゃないですか、放っておいても。ゴブリンが単独で生き延びるのは大変ですから」

エスカは自然淘汰的な考えで、わざわざ手を下すまでもなく、はぐれのゴブリンなど放っておけばいいだろうという意思が感じられた。

だからといって、彼女が冷たい人間ということにはならない。

むしろ、俺のようにゴブリンに同情を示す者は少数派だろう。

エスカは会話しながらも手際よく動いていた。運ぶために持ってきたと思われる袋に肉をしまっ  
ていく。

最後にシカの亡骸なきがらの近くに線香のような細い棒を刺して魔法で着火した。

上空に向けて緑色の煙が立ちのぼる。

「久しぶりを見るな。マーカーか」

「はい。町から遠くないので、すぐに回収してくれると思います」

マーカーとは冒険者からギルドへの狼煙のろしに似た役割があり、駆除対象の発見、依頼品の回収、あ

るいは緊急事態などを知らせることができるアイテムだ。

何種類か色分けされていて緑色は回収依頼を意味する。今回の依頼であれば回収だけでなく確認も兼ねているはずだ。

俺が知る限り、火急の知らせを意味する赤色が使われたのはドラゴンと遭遇した冒険者が使ったケースのみで、その時は無双のハンクと呼ばれる凄腕の冒険者が解決したそう。

「それじゃあ、町に戻りましょうか」

「そうしよう」

帰り支度を済ませたエスカに促されて、俺たちはその場を後にした。

畑の広がる一画を離れて街道に出る。

時折、馬車に乗った行商人や旅人とすれ違った。

冒険者をしていた頃は、この街道をずっと進んでいけばどこか遠い町にたどり着くのではないかと思っただけでワクワクしたものだ。

「わたしとマルクさんが食べる分は確保しておきましたけど、どこで食べます？」

感傷に浸りかけていたが、エスカの声で我に返った。

「うちの店でいいよ。道具が一通りあるから」

「それじゃあ、お願いしますね」

エスカは微笑みを浮かべて言った。心が洗われるような笑顔だった。

バラムの町に到着した俺たちは、そのまま俺の店に向かった。

店に入ると、本日の功労者であるエスカを座らせて準備を始める。

彼女が持ち帰った肉は大きなブロックになっていた。

それを調理場で食べやすいサイズに切り分けていく。

念願の焼肉屋を始めたといっても、転生前はカフェの経営者だった俺は肉の知識がまだ乏しい。

この部位がロースではなくモモ肉であることぐらいしか分からない。

切り分けた肉を皿に盛りつけると、美しい赤みのあるシカ肉が均等に並んだ。

上手く盛りつけられたことに満足しながら、皿とトングを持ってエスカのところに戻った。

「ありがとうございます。うわー、美味しそう！」

「エスカのおかげだ。こんなに新鮮なシカ肉はなかなか手に入らない」

彼女の満面の笑みを目にした後、焼き台の下にいつものようにサスペンドフレームで火を入れた。

「少し待ってくれ。温まるのに少し時間がかかる」

「それにしても面白いですね。魔法でお肉を焼くなんて」

「炭火もありだと思ったけど、炭はなかなか手に入らないからな」

「うーん、たしかに見かけませんね」

この世界だと炭は生産者がおらず、流通量は限られている。

二人で話すうちに鉄板に火の熱が伝わったようだ。トングを手に持ち、皿から鉄板へと肉を移していく。

肉が鉄板に触れた瞬間、ジュツと音がして食欲をそそる香りが立つ。空腹だったせいかすぐに食べたい衝動に駆られた。

「……そういえば、ナイフとフォークを出してなかったか」

「あたしもうっかりしてました。お肉のことで頭がいっぱい」

「すぐ持つてくる」

俺は席を立つて店の中の食器置き場に向かった。

ナイフとフォーク、取り皿、あとはシカ肉に合いそうな特製ソースの入った容器。

それらを手に取って店を出ようとした瞬間だった。

「……何だ、この気配は……」

慌ててエスカのところに戻ると、見慣れない人物が立っていた。

感じたことのない気配に身構えるが、エスカとその人物が親しげに話しているのを見て、警戒を解く。

「エスカ、その人は知り合いか？」

「ええと、初対面です……でもすごく有名なかたですよ！ このかたは伝説のSランク冒険者のハンクさんです！」

「ちわつす、冒険者のハンクです」

初めて見る伝説の男はずいぶん軽いノリだった。

持っていた食器類をテーブルに置いて深呼吸した。

この状況を受け止めきれない自分がいる。

——それにしても、伝説の冒険者、無双のハンクがどうしてここに？ 緑がかった色の野暮った

い髪の毛と後ろに背負ったバックパック。

すごく男前ではないものの精悍な顔立ちと佇まい。

そこから放たれるオーラを肌で感じて、ハンク本人に間違いないと確信する。

「近くを歩いていたらなんだかい匂いがして、つい引き寄せられちゃった」

超がつくほどすごい冒険者が、こんなふうに親しみやすいとは想像もつかなかった。

「……よかつたら、一緒に食べます？」

「ホントか！ ここは親切に甘えさせてもらうぜ」

「まあ、いっぱいありますんで。いいよな、エスカ？」

「もちろんです！」

店から追加で一人分の食器を手に取って再び席に戻ると、ハンクは椅子に腰を下ろしてくつろいでいた。ずいぶんマイペースな人みたいだ。

ハンクから焼き台の上に視線を移して、焼き具合を確認する。生焼けは避けたい。

十分に焼き目がついて、表面の水分が適度に蒸発している。

肉を一つずつ丁寧にひっくり返して確認しながら、火が通ったものを取り皿に移す。

焼きたての肉から湯気が立ちのぼり、食欲を刺激する香りが漂う。

「珍しい調理法だな。まさかそのまま食べるわけじゃないだろ？」

「これで味つけします」

俺はハンクの言葉に応じながら、特製ソースの入った容器を手取る。肉の食べ方にバリエーションを出すために、果実と香味野菜にハチミツを加えて保存したものだ。

そのソースを焼き上がったシカ肉にたっぷり塗れば、見た目にも食欲をそそる仕上がりになる。

「お待たせしました。それじゃあ、召し上がれ」

「シカ肉バンザイ！ いただきます」

「ありがとな。相伴にあずかるぜ」

二人はナイフとフォークを手に取り、一心不乱に肉を食べ始めた。

俺も空腹だったので、すぐに自分の皿を手元に引き寄せた。

左手でフォークを取って肉に刺すと、ほどよい柔らかさだった。ナイフで切れ目を入れようとしたが、全然力を入れずにスツと切れた。小さく切り分けたシカ肉を口に運んで、じっくりと咀嚼して旨味を味わう。

果実の酸味とハチミツの甘みが肉汁と組み合わせ、香味野菜の風味がシカ肉の旨味をより鮮や

かに引き立てる。素材のよさも相まって目を見張るような完成度だった。

「美味しいー！」

口の中の肉汁を堪能していると、ご機嫌な様子のエスカが口を開いた。

「こいつはどこで獲れたんだ？」

「その彼女が駆除依頼を受けて、手に入れました」

「この辺りにはそんな依頼があるのか。今までおれが受けたのはモンスター退治やダンジョンの調査ばかりだぞ」

「そっちの方がうらやましいです！ あたしはダンジョンなんて行ったことありません。行ってみたいな」

ハンクの言葉にエスカが目を輝かせて反応した。

伝説の冒険者がエスカに問いかける。

「お嬢ちゃん、ギルドでのランクは？」

「Dランクです」

「……ふーん、そうか」

エスカの回答を耳にした後、ハンクの中で少し考えるような間があった。

そして、おもむろに口を開いた。

「Cランクまで上がったら、実力と実績のある仲間パーティーを組んだ方がいい。そしたらダ

ンジョンに行っても問題ないかもな。Dだと使える魔法も限度があるだろうから、少し危なっか  
つ」

「そうなんですな！ 先輩、ご指導ありがとうございます！」

「おれを先輩と呼ぶなんて面白い嬢ちゃんだ。上のランクに上がれるといいな」

エスカの謙虚な姿勢にハンクは上機嫌な様子だった。

この世界のダンジョンとは、かつて魔王がいた時に作られたものの総称だ。

他にもモンスターだらけの洞窟、朽ち果てた遺跡がそう呼ばれることもある。

バラム周辺にはほとんどないので、あまりギルドの依頼に出ることはない。それと無用な事故を  
避けるために、不要な探索、調査は止められる。

俺自身も数える程度しか行ったことがない。

もちろん、その時はパーティーを組んで向かった。

危険性を考慮すればハンクの言うように、Cランクからというのは妥当だろう。

それから俺たちは談笑しながらシカの焼肉を平らげた。

食べきれなかった時の保存方法を考えていたが、三人で食べたらあつという間になくなってし  
まった。

かなりの量があつたのに、ハンクはまだ食べられそうな雰囲気だった。

「マジで美味かつたぜ。こんな食べ方があるなんて知らなかった」

食事を終えたハンクは感心しきりだった。

そこまで満足してもらえたのなら、調理者冥利に尽きる。

「それで支払いなんだが、現金は持ち歩かねえからな。こいつを代わりに取っておいてくれ」

「えっ、いいんですか？」

ハンクから手渡されたのは革製の鞆かぶとに収まった一振りのナイフだった。

柄の部分だけが露出しており、艶つやのある綺麗な木目に目を惹かれる。

「ミスリル製だ。それなりの価値はあるはずだぜ」

「あ、ありがとうございます」

「当分この町をうろろするつもりだから、気が向いたらまた寄らせてもらおうぜ」

「いつでも歓迎します」

「わたしもまた会いたいです！」

「それじゃあ、二人ともまたな！」

ハンクはひらりと手を振って颯爽さつそうと去っていった。

伝説の冒険者は一陣の風のようにさわやかで、大樹の幹のように揺るぎない芯を持つ人だと  
思った。

ハンクと会った日から数日が経過した。ハンクからもらったミスリル製のナイフは、切れ味と美

しさが両立されており、超絶技巧が施されていた。

人間の中にも優れた腕前の鍛冶師<sup>かじ</sup>はいるが、到底人間業とは思えない。

ドワーフを町で見かけたことは数える程度だが、彼らが作った可能性が高い。

失くすのが怖くて肌身離さず持ち歩き、誰もいない時には取り出して思わず眺めている。

それぐらい素晴らしい完成度だった。

そんなナイフと財布を懐に入れて、俺はバラム中心部にある家を出発する。

店で使う肉の仕入れと自分の食事の用意が目的だ。

エレーヌ川にかかる橋を渡り、マーガレット通りの市場を目指す。

夕方に差しかかる時間帯だったこともあり、空が黄金色に染まり始めている。

王都のように栄えている都市はともかく、バラムの人たちは日本のような長時間労働という概念もなく、仕事帰りと思われる人たちが歩いていった。

商人や職人、ギルドの関係者など色んな職業の人々とすれ違いながら、マーガレット通りに到着すると、夕食の買い出しに来た人たちが賑わっていた。

市場の入口には花屋があり、ここからしばらく先まで露店が続いていて、次は果物を売る店が数軒並ぶ。

リンゴ、オレンジ、ブドウなど色とりどりの果物が売られているが、実はどれもそこまで甘くはない。見た目は元いた世界のものそっくりだが、味は別物だ。

この世界では果樹の栽培技術が発展していないため、道端に自生したものと糖度に大きな差はなかった。

「見た目は鮮やかなのになあ」

タレ作りで出番はあるかもしれないが、積極的に食べたいものではなかった。

果物屋の辺りを抜けて鮮魚店が軒を連ねる一画に入った。

今日の目当ては肉なので、ここは通過して先に進むと精肉店の並んでいる場所が見えてきた。

この辺りの店主はだいたい顔なじみだ。

それぞれの店の店主と言葉を交わしながら歩いていき、仕入れ先であるセバスの店の前に来た。

先にいたお客が彼の接客を受けて肉を買って帰るところだった。

先客が立ち去ったのを見計らって、セバスに声をかける。

「今日も売れ行きは順調そうだな」

「マルクじゃないか。仕入れの分なら取ってあるぞ」

「じゃあ、早速いただこうかな」

「おう、ちょっと待ってくれ」

無事食材を調達してセバスの店を後にしようとしたところで、思わぬ人物が近づいてきた。

「すげーな、エルフじゃないか。初めて見た」

セバスがその姿を見て息を呑む。

「バーニングレッド……アデル」

こちらの視線に気づくとアデルがまっすぐに歩いてきた。

「あら、珍しい肉料理店の店主」

「……これはどうも」

相手は貴族や王族ではないのだが、何となく対等に話すことに抵抗があった。今日もこの前と同じようにオーラめいたものを感じる。

「もしかして、ここがあなたの仕入れ先？」

「そうです」

「この辺りは牛の肉が中心なのね。そんなに緊張しなくていいわよ」

俺が萎縮しじくしているのを感じたのか、アデルが微笑む。

「すげーな、マルク。エルフと知り合いなのか」

俺とアデルのやりとりを見ていたセバスは驚きが隠せない様子だった。

「はいはい、そこ、エルフは見せ物じゃないわ」

「おっと、こいつは失礼」

「分かればよろしい」

セバスが謝罪したことで、それ以上アデルは追及しなかった。

「店主に聞きたいことがあったのよ。この辺りに知り合いがないから」

「俺にですか？ 何について？」

店主ではなくそろそろ名前を覚えてほしいと思いつつながら、俺は話を続けた。

「この町の周辺に希少なワインがあるって噂を聞いたのよ。しばらく調べてるんだけど、目ぼしい成果が上がらないのよね」

「そこまで高級なワインとなると庶民は飲まないですよ。バラムの金持ちに聞いた方が早いんじゃないですかね」

セバスが口を挟むが、言っていることは適切だった。俺も高級なワインを飲んだことはない。

そもそも、取り扱っている場所が少ないのか、酒屋で売っているのを見かけたこともない。

だがしかし、希少なものに詳しい人物なら心当たりがあった。

「あの、アデルと呼んでも……？」

「ええ、問題ないわ。それより続きがあるなら話して」

「アデル、ここでは話しづらい内容なので場所を変えてもいいですか？ うちの店とか」

「それでいいわ」

セバスの店の前で長話をするわけにもいかないというのもあるが、この手の話は大っぴらにするべきではないと俺は判断した。冒険者だった時の直感だ。

わずかに肌寒さを感じさせる夕方の風。遠くの方でゆっくりと太陽が沈んでいる。

道端の魔力灯にぼつりぼつりと明かりが灯っていく中、俺とアデルは店に向かっていた。

二人で通りを歩いていると、通行人がちらちらとアデルを見ていた。

おそらくそれが理由なのか、彼女は不機嫌そうだった。

移動の道すがら、人通りが少なくなったあたりでアデルがゆっくりと話し始めた。

「心当たりがあるみたいでホッとしたわ」

「それはどうも。お目当てのワインをそんなにもご所望で？」

「キフワインって分かる？」

「キフ……ワイン、ですか」

転生前の記憶を辿ろうと試みたが、なかなか思い出せなかった。

「特別なブドウを使ったワインと言えば伝わるかしら」

「——そうか、貴腐キフワインのことか！」

「分かってもらえたなら話が早いわね。私が探しているのはそれなの」

アデルは話を通じたことに満足したようで、少し表情が柔らかくなった。

二人で話しながら歩くうちに店の敷地が近づいてきた。

敷地に入ると、屋外用のランプに火を灯す。

「適当に座ってもらえれば」

立たせたままにするわけにもいかず、アデルをテーブル席の椅子へ案内する。

「ええ、ありがとう」

「お茶を準備するので、少し待ってください」

「気が利くのね」

アデルがそう言っただけで腰を下ろした。

調理場のランプを点けてから、簡易冷蔵庫の扉を開けて、冷やしておいたハーブティーを取り出した。

余ったハーブで作っただけだが、素材がいいおかげで香りの質が高い。

それから、ジンの入った瓶を脇に挟み、来客用のカップを手に取った。

ワインを探しているぐらいなので、アデルは酒を喜んでくれそうな気がした。

「お待たせしました」

「かほ芳しい香りがするわね。何が出てくるのかしら」

「ハーブティーとこの町で蒸留されたジンです。お酒はいける口で？」

「すぐに酔いはしないわ。初対面で泥酔するような節操なしではないわよ」

「これは失礼しました」

俺とアデルは互いに笑みを浮かべた。

そのまま給仕に取りかかる。

カップにジンを少量入れた後に適量のハーブティーを注ぐ。

それからマドラー代わりの棒で数回ほど柔らかく混ぜる。

「これでよしと」

完成したものを差し出すと、アデルはじつとカップの中身を眺めた後、静かに口へと運んだ。

「これはなかなかいいわね」

「気に入ってもらえたようで」

「あなたは何か飲まないの？」

「そんなに喉のどが渴かわいてないので」

「遠慮しないで。これを飲んだら？」

アデルは荷物を入れていた袋から、瓶のようなものを取り出した。

見た目から察するに高級ワインか何かだろうか。

「それは？」

「少し前に貴族から求婚されて、その時にもらった果実酒」

「それは色んな意味で重い贈り物……というか高そうですけど」

「この手のお酒は飲み尽くしたから」

「ではお言葉に甘えて」

そそくさと厨房にマイカップを取りに戻ってから、アデルのところに向かう。

彼女はすでに栓を抜いてスタンバイしていた。

立ったままではぎこちないので、彼女の向かいに腰を下ろした。

マイカップをテーブルに置くとアデルが果実酒を注いでくれた。

「さあ飲んで」

「では……その前に乾杯を」

「そうね、そうしようかしら」

アデルの同意を受けて、一礼してカップを掲げた。

「——名高き果実酒に」

「——若き店主の繁栄に」

「——祝福を」

俺たちは互いのカップを合わせて乾杯した。

期待を抱きながら、アデルに注がれた果実酒を飲んでみる。

カップが口に触れた瞬間に芳醇ほうじゆんな香りが漂ってきた。果実の濃厚な風味が広がっていく。

「これは野イチゴ……ベリー系の果物を発酵させたものか」

「甘そうな果実酒ね。度数も低いでしょうからお子様向けかもね」

「あはは、なかなか手厳しい。これはこれで美味しいですよ」

子ども向けにしては上品すぎる味わいだった。

俺はこれを飲めた幸運に心の中で感謝する。

「ところで、あなたの心当たりって何だったのかしら」  
果実酒を味わっているとアデルが本題を切り出した。

「少し前に無双のハンクに会ったんですよ。彼ならお宝に詳しいんじゃないかと」  
「すごい名前が出てきたわね。まさかこの町にいるの？」

「つい最近そこで一緒にシカ肉を食べたばかりです」

ハンクが座った席を指先で示すと、アデルが目を追ってから信じられないという表情を浮かべる。  
「諸国放浪の旅をしていると噂だけれど、またこの店に来るのかしら」

「別れ際に、また会おう、みたいなことは言っていましたね」

社交辞令かもしれないので、期待していいのか分からないが。

「そういうことなら、無双のハンクに会った方が早そうね」

アデルがどう解釈したか分からないが、少なくとも納得したような様子だ。

カップの中身をぐいっと飲み干して彼女は椅子から立ち上がった。

「明日は店を開くのよね？」

「そのつもりですけど」

「じゃあまた来るわ」

アデルはそれだけ言い残して、優雅に身を翻して去っていった。

燃えるように赤い髪が路地の魔力灯に照らされて、徐々に遠ざかっていく。

「うーん、明日も来るのか。凝ったメニューを準備した方がよさそうだな」  
誰もいないテーブルで思わずぼやく。

肉は十分に用意があるし、食べ方に変化をつけるとしよう。

俺はカップに入った果実酒を飲み干した。

夜空を見上げると星々が輝き、涼しげな夜の風が頬に触れた。

翌朝。いつものように店に出て周囲の掃除を始めた。

転生前の記憶の影響か、朝の掃除をしないと落ち着かない。

さわやかな朝日の下で街路樹の落ち葉を掃き集める。

ごみを拾い終わった頃、大きな台車を引いた人が近づいてきた。

「毎度どうもー、氷屋です」

「おはようございます」

「氷はいつものところですか？」

「お願いします」

顔なじみの氷屋の男は手際よく台車から氷を下ろして店の中に向かった。

バラムは穏やかな町で人の隙をつけて金品を盗むような者はいない。

治安の悪い地域では一部始終を見届ける必要があるだろうが、そこまでする必要はなかった。

「ほいじゃあ、またー」

「苦勞さまです」

水屋の男は台車を引いて軽やかに去っていった。

台車で水を運ぶ作業は重労働のはずだが、苦にしているようには見えない。仕事ぶりを知る人中ではドワーフのハーブであるとか、魔法で身体強化しているとか……色んな噂がある。

「実際のところ、どうなんだろう」

俺は掃除を終えて店の中の調理場に向かった。

簡易冷蔵庫を覗いてみると、牛ロースと塊肉がしつかり冷えている。

「ロースの食べ方を変えるか、塊肉を使ってみるか……どちらにすべきか」

二つの肉を前にした状態で頭を悩ませる。

アデル以外のお客のことも計算に入れているが、彼女が来るのなら相応の準備が必要だろう。

しばらく考えてから塊肉を使うことにした。

今度はどんな料理にするかを決めなければ。

そこでふとアデルが置いていった果実酒が目に入った。

昨夜に飲んだ量は多くなく半分以上中身が残っている。

「ベリーソースというのもありか」

脳裏を一つの調理法がよぎった。財布を手に取ってすぐさま市場に向かう。

果物屋に到着すると、新鮮そうな木イチゴを購入して、傷めないように気をつけながら急いで店に戻る。

厨房で、購入した木イチゴを調理台の上に並べてから、手早く水洗いして味見をする。

口の中にほんのりと甘みが広がった。みずみずしい食感が新鮮さを物語っている。

素材は問題ない。あとは作り手の腕次第だ。

かまどに何本か薪を投げ入れて魔法で着火する。

サスペンドフレイムはお客様が肉を焼く時に火の番をしないで済むという点で適しているが、そこまで火力が出ないため、自分で料理する時にはあまり使わない。

かまどの火力が十分になったところで鍋を置いて材料を投入していく。

材料は木イチゴ、果実酒、ソルサ、砂糖少々、香りづけのハーブ。

ソルサはウスターソースに似た調味料で、家庭料理によく使われている。

鍋の中を木べらで混ぜ合わせっていると、調理場に甘く深みのある香りが漂う。

温度が上がってきたところで、火力に注意して焦げつかないように煮詰めていくとベリーソースが完成した。

少し冷ましてからスプーンでそっとすくって、とろみのついたソースを舌先で味わう。

「これはなかなかの出来だな」

ほどよい甘みにソルサやハーブのアクセントが組み合わさり、肉料理に合う軽やかな酸味がした。

鍋に蓋をして今度は塊肉を切り出す作業に入る。

お客に焼いてもらうスタイルである以上、厚みはそこまで出せない。かといって、薄すぎるとソースの味に肉の旨味が負けてしまう。

悩んだ末に鉄板で焼いて試しながら、ちょうどいい厚さを決めた。

肉とソースを開店前に用意し終えた俺は安堵の息をつく。

店内の椅子に腰かけて、アイステーで水分補給を済ませる。

椅子とテーブルを拭き終わったところで、誰かが近づいてきた。

「店主、早速来たわよ」

「ど、どうも……」

アデルが腕組みをしてこちらを見ていた。

予告はしていたが、実際に来ると驚いてしまう。

汗ばみそうな陽気のせいか、彼女は下ろしていた髪を一つにまとめて結っている。

身なりはいつも通りに上品だった。

「席に座ってもらって大丈夫ですよ」

「ただハンクを待つだけなのも退屈だし、何か出してもらえるかしら」

「すぐに用意します」

相変わらずアデルを前にすると緊張するが、段々と慣れてきた気もする。

そそくさと調理場に向かい、塊肉が盛りつけてある皿を冷蔵庫から取り出した。

最終確認のためにもう一度ベリーソースの味見を行う。

食器の用意を済ませて、アデルの席に順番に運んだ。

簡単な説明をすると、トングで肉を挟んで鉄板に並べていき、彼女は焼ける様子をじっと見つめていた。

そんな非日常の光景が近寄りがたい雰囲気なのか、行人人は遠巻きに眺めては通りすぎていった。複雑な心境で待っていると、焼き上がった肉をアデルが食べ始めた。

酷評されるとは思わないが、今回は岩塩の時よりも個性的な味付け。彼女の口に合うのか読めない。

「これはどういうこと!?!」

アデルが食ってかかるような声を上げて、俺は思わず飛び上がりそうになる。想定外の反応で混乱した。

もしかして、お気に召さない味だったのだろうか。

俺は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

「美味しい。食べたことのない味よ」

「ほっ……気に入ってもらえたならよかったです」

平静を装いながらアデルにそう応える。

「昨日の果実酒をベースに色々組み合わせたってところかしら」

「その通りです」

彼女は興味津々な様子で肉にソースをつけてはじっくりと味わっている。

その反応を見る限り、ベリーソースという選択は正解だったみたいだ。

元の世界でもこの手のソースは珍しい部類だし、この世界では使われていないのかもしれない。

アデルがここまで評価してくれるということは、一般客にも受け入れてもらえそうだ。

そんなふうになると、この店がさらに繁盛するイメージが浮かんで胸にきらめくような希望が湧いていく気がした。

だが、肝心のアデルのハンク探しは空振りだった。

彼女は食後のアイステイーを飲み干した後、また来るわと言って立ち去った。

この日の料理もお気に召したようで、アデルは金貨一枚を置いていった。

アデルはそれ以降も何度も店を訪れた。

俺は毎日のようにメニューに工夫を凝らしてアデルが飽きないようにした。

アデルがエルフということで、緊張する人がいる状況は続いているものの、彼女の金払いがよく、エルフのことが平気なお客がいることもあって、黒字が続いている。

アデルは常連と言ってもおかしくないほど店に通っていた。

今日も開店準備を終えてしばらくすると、店先にアデルの姿が見えた。

「すぐありがたいんですけど、肉ばかりで飽きませんか？」

「私が飽きないように調理しているあなたがそれを聞くのかしら」

まるで見透かしたような言い方だった。

アデルは少し皮肉っぽい笑みを浮かべている。

「うんまあ、そうっちゃそうですね。席へどうぞ」

アデルをテーブルに案内すると、彼女は勝手知ったる様子で椅子に座った。

「今さらですけど、ハンクは来るんですかね？」

アデルに情報提供した俺が切り出すのも変だが、ハンクがしばらく顔を見せていないため、自信がなくなっている。

「きつと来るわ」

「……何か根拠が？」

「強いて言うならエルフの勘ってやつかしらね」

アデルは興味のなさそうな表情で、髪の毛を指でぐるりと回した。

同じような状況になったとして、何日も空振りだったら俺なら諦めそうだ。

エルフは長生きで人間と時間の感覚が違うから、時間を無駄にすると思わないのだろうか。

そんなことを聞こうと思ったが、彼女の逆鱗げきりんに触れそうな気がして口を閉じた。

この日も同じように、ハンクが来ないまま時間だけが経過すると思つた。

新作の肉料理を出して、それをアデルが食べる。

デジャブのような光景が広がる。

しばらくしてアデルが食後のハーブティーを飲み始めた時だった。

彼女は何かに対応するように顔を上げて、静かに後ろを振り向いた。

「美味そうな匂いがしてんな」

俺がアデルの視線の先を見ると、ハンクが立っていた。

「あなたがハンクね」

アデルは面識がないはずだが、ただならぬ気配を感じてハンクだと理解したようだ。

椅子に腰かけたまま、顔だけ振り向いて話している。

「初めて見る顔だな。あんた誰だ？」

「私はアデル。貴重なワインに詳しい人を探していたら、ここの店主からあなたのことを教えてもらったのよ」

「そういうことか……ワイン。頼りにされるのは悪くねえが」

ハンクはしばし沈黙する。その様子から迫力が感じられた。

「あのその、勝手にすみません」

「いいってことよ。その程度のことには気にしねえさ」

ハンクは問題ないと言うように穏やかに微笑んだ。

「それで、何か情報はないかしら？」

「珍しいワインが眠る遺跡なら聞いたことがあるな」

「へえ、遺跡。その線は考えなかつたわ」

アデルは納得するようにうなずいた。

そして、椅子から立ち上がり、ハンクの目の前に立つ。

「冒険者ハンク。そこに案内して」

「その遺跡にか？ 案内するのは構わねえが、その前におれにも肉を食わせてくれ」

「はい、ただいま」

ハンクは注文をした後、アデルとは別の席に腰を下ろした。

今日のメニューはアデル限定で高価なヒレ肉——牛肉の女王様——を使った料理を提供していたが、ハンクはがつつり食べたいはずだ。

タレはアデルと同じスパイシーなものでもいいが、肉は食べごたえのある脂身が多い部位の方が喜ばれるかもしれない。

ハンクの席に一式運ぶと、ハンクはすぐに焼き始めた。

じつと焼き加減を気にしながら、タレをつけては口へ運ぶという動作を繰り返す。

かなりの量を盛りつけたはずだが、すぐに完食してしまった。

立ち読みサンプル  
はここまで

ハンクが食事を終えた瞬間、それまでじっとしていたアデルが切り出した。

「さっきの遺跡だけど、どの辺りにあるのかしら」

「ワーズの村。その近くだ」

「そんなところにあるんですね」

冒険者をしていた頃にワーズ周辺を訪れたことがあるが、遺跡の話は聞いたことがなかった。

「人が立ち寄らないような場所にあるからな」

「それでいつ行けるの？」

「そうだな。今日でなければいつでもいい」

「今日以外なのは何か理由があるのかしら？」

俺もアデルと同じことを思った。

「遺跡に着くのは夕方。今から向かって探索したらあつという間に夜だ。暗い時間は避けたいんだ

よな」

「……まさか」

「そのまさかだ。アンデッドが出るんだ」

アデルはハンクの言葉を聞いた後、少し考えるような間を置いてから言った。

「……目的のワインを手に入れるためなら」

「度胸は認めてやりたいところだが……そもそもあなたは戦えるのか」

「もちろんよ。その目で確かめてみる？」

二人は椅子に腰かけたままだったが、周囲の空気が張り詰めた感じがした。

静寂の中、アデルがそっと手のひらを上に向けた。

「——ライトニングボルト」

彼女の立っている場所から真上に向かって、一筋の稲光が走った。

上空は雲がほとんどない快晴で、その光が魔法によって起きたのは明らかだった。

「え、えっ？ 今のライトニングボルトですか!？」

目の前の出来事が信じられず、俺は興奮気味に声を上げた。

「ええ、そうよ」

アデルは大したことはないと言わんばかりに、涼しげな顔で応じた。

「あんたにそれなりの魔力があるのは分かった」

ハンクは席を立ち、背中を向けて帰ろうとした。

「ちょっと待った。あなたの実力も見せてちょうだい」

「おれもか……しょうがねえ。見せてやるよ」

ハンクはホーリーライトを唱えて左手に光を発現させた後、右手で石ころを拾って真上に投げた。続いてそれが落下してくるところを手刀で細かく刻んだ。

「す、すごっ……」